ともなるいのちへの目覚め

長島　秀賢

先日あるお宅に月参りに伺った時の出来事です。
５才の男の子が、お母さんと二人で私を出迎えてくれました。いつもならお母さんがちょっと目を離すと、お経の間でも走り回っているぐらい元気な子なのですが、今日は沈んだ表情でお内仏に向かってちょこんと正座しています。
「何があったのですか？」母親にわけを尋ねると、「実は２～３日前に玄関先で三輪車で遊んでいた時に、不注意でカエルをひき殺してしまったのです。それ以来、〔カエルさん痛かったよね。カエルさんごめんね。〕と涙ぐんで、ずっと落ち込んでいて見ていられないのです。『カエルさんのお経』をあげてもらうことはできないでしょうか？ご無理を承知でお願いします。」
私は内心「カエルさんのお経というのはいかがなものだろうか」と迷いながらも、男の子の姿を前にして引き受けずにおられませんでした。
私がお経をあげている間、後ろから「なむあみだぶつ。なむあみだぶつ。」の声が聞こえます。小さな手を必死に合わせながらお参りする姿が目に浮かびます。
お経が終わって「ボクの命も、カエルさんの命も、共なる命。同じ命をいただいているんだよ。どうか今の気持ちをいつまでも忘れないでね。」そう声をかけると、男の子はにっこりとうなずいてくれました。
小さな子の持っている「素朴な宗教心」。そういった「お念仏の小さな芽」を守り、育んでいくこと。私たち大人の役目なのではないか。そんなことを考えさせてもらうご縁でございました。